

目次

第一章 労働運動の基礎知識

I 労働者の力とはなにか

- 1 労働者は「多数」である 12
- 2 「生産」をにぎるもの 15
- 3 労働者は「生産」の担い手——社長は寝ていても工場は動く 20
- 4 激化する階級闘争 22
- 5 ひろがるストライキの波——政治闘争の増加 29
- 6 社会主義は今日の問題 35
- 7 社会主義国の発展と力——民族独立闘争の骨 35

II 資本主義と労働者階級

35

1 労働者階級とはなにか

35

労働者とは職業をさすのではない——労働者の「強さ」と「弱さ」
帝国主義と労働者 40

40

文化もいのちも略奪する——独占とは一手にやる支配体制——内
から外へ、市場をもとめて——戦争を急ぐ死の商人たち

3 資本家は労働者なしでは生きてゆけない 47

47

リボビタンで五億円——資本主義社会の仕組み——無視される公
共の利益

4 運命をきり開いていく労働者階級 51

51

資本主義と社会主義のちがい——社会主義をめざして——労働者
階級の歴史的使命——革命は自然に進まない

第二章 労働者と労働組合のたたかい

59

I 労働者と労働組合

60

1 労働者仲間の「仁義」 60

60

労働者の団結の強さ——要求はかけあうことで実を結ぶ

2 自分のことは自分できめる 65

65

分裂組合での貴重な経験——団結自治は労働組合の貞操——労働組合のタテ糸とヨコ糸——日本の労働組合の弱点

3	組合運動は法律のまえからあった	74
---	-----------------	----

思想を犯罪とみなして——国境をこえて連帯する労働運動

4	労働組合と団体交渉	79
---	-----------	----

幹部の力は交渉能力に——陳情と団体交渉のちがい

5	資本家と労働組合対策	84
---	------------	----

俺一人ぐらいという考え方——組合を企業にとじこめる——資本家が考える労働組合——法にたよっては生きられない

II	労働組合のたたかい	92
----	-----------	----

1	労働組合と賃金闘争	92
---	-----------	----

賃金はどこでまゐるか——春闘、それは「床屋の看板」——人間として生きる権利の主張

2	物価値上げと重税反対闘争	98
---	--------------	----

もうけはふえても物価は下げぬ——物価値上げは「結果でない」——税金による収奪のカラクリ

3	労働組合と労働協約	104
---	-----------	-----

たたかひの戦利品——労働協約——労資平和と労働者のたたかひ——期限つき協定の誕生——スケジュール闘争はとうぜん——協約は力でもる——団結承認をめぐる協定——アメリカ占領政策と労働運動——自動延長は認めない——アメリカ渡来輸入協約——就業規則は資本の提案——団体交渉の優先——労働者が悪いんじゃない——労働協約に職場のにおいを——団結をよめる協約はいらない——無協約をおそれず、協約をあなどらず

第三章	労働運動の課題と実践	129
-----	------------	-----

1	運動大衆化の三課題	130
---	-----------	-----

2	組織強化の重点と目標	130
---	------------	-----

出発点に立ちかえろう——一人ひとりが運動の主人公——話しあいから運動へ

3	職場闘争の再検討	135
---	----------	-----

休暇はお願いするものか——職場の共通要求と個別要求——職場闘争と統一要求

4	職場闘争と思想闘争	139
---	-----------	-----

二つの心がたたかっている——たたかひのなかでの階級的自覚を

5	労働組合と職場組織……………	144
	組織は下からつくられる	
6	幹部と組合員の団結強化……………	146
	ふえる「自家発電」組——幹部は会議要員ではない——外から内へ、 ものいう空気——深くつよく結びつく	
7	団結強化と組合民主主義……………	152
	組合民主主義の出发点——命令で統一はまもれない——少数も多 数になれる自由——政党は労働組合を指導すべきか——指導能力 と指導方法——異常な内縁関係による混乱——反独占のより高度 な統一闘争	
8	団体交渉の再検討……………	165
	交渉委員は組合がきめる——団交軽視は共通の弱点——団交は技 術ではない——交渉力つよめるストライキ——ストライキは基本 的な権利	